

知覚と感受の言葉を使えるようになるための鑑賞指導

—中学校音楽科における常時活動の実践を通して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 中村美友

1. はじめに

今年度の教育現場は、新型コロナウイルスの影響が緩和され始め、コロナ禍以前の教育活動が戻りつつあった。本研究では、昨年度の研究から引き続き、鑑賞領域での「批評」に着目した指導法として常時活動の実践を行った。2年間の実践から見えてきた中学校音楽科における鑑賞領域での効果的な常時活動の在り方を一提案という形でまとめる。

2. 研究動機

現行学習指導要領解説において、鑑賞領域では「生徒が音楽活動を通して音楽に関する用語やその意味などを知り、それらを適切に用いて表すことができるように指導することが大切である」と示されている（学習指導要領解説 p.57 1.第1学年の目標と内容 (2)B 鑑賞）。ここから、鑑賞領域での学習において、生徒が音楽を言語化して表現することができる力を獲得できるような指導が求められていることがうかがえる。

また、2年目に実習をさせていただいた甲府市立のある中学校での事前アンケート調査によると、「鑑賞の授業についてどう感じていますか？」の設問に対し、得意（好き）・やや得意（やや好き）と答えた肯定的な回答が約51%だったのに対し、「鑑賞の授業で曲を聴き、その曲の良いところを見つけたり、なぜそう思ったのかを言葉で説明したりすることは得意（好き）ですか？」という設問では、肯定的な意見は約23%に留まった。この結果から、鑑賞の授業そのものには肯定的であるものの、言葉で説明するという過程を追加すると鑑賞活動に対する苦手意識や嫌悪感を持つ生徒が

増えるということがわかった。

しかし、鑑賞の授業の評価は文章化された成果物で行われることが多いというのが現状であると思う。生徒らには曲のよさやおもしろさを言葉で説明することができる力が求められ、こうした状況下では、言葉で表すのが苦手で、良いなと思うところがあっても上手く言葉にできずに困っている生徒や、そもそも説明の仕方がわからずにいる生徒を取り残してしまうこととなる。こうした現状に課題意識を感じ、また、今後自身が音楽科の一教員として授業づくりをしていく際にどのような指導ができるのかについて考えたいと思い、本研究を始めた次第である。

3. 研究目的

では、実際にどのような指導ができるのかと考えていた折に、継続的に学習を積み重ねていくことができる常時活動の存在を知り、本研究の主軸として2年間実践研究に取り組んだ。先行研究を辿ると、常時活動は小学校での実践例が多く、中学校以降の教育活動の中では目立って取り入れられることが少ない。そこで本研究では、中学校音楽科の鑑賞領域における常時活動の有効性を明らかにしたい。継続的な学習によって、生徒が知覚と感受の言葉を獲得すること、また、知覚と感受の言葉に関連づけながら使えるようになることを目標としている。

4. 研究方法

授業の冒頭10分間で鑑賞の常時活動を行い、生徒の反応や、ワークシート等の記述内容の変容を見取る。また、事前アンケートと事後

アンケートの結果を比較し、鑑賞領域の学習に対する意識の変化を調査する。

5-1. 常時活動とは

ここから、具体的な研究内容について示す。まず、『教育音楽』（2011）においては、「常時活動とは毎時間の授業の冒頭を使って、継続的な音楽の力をつけていくものだ」としている。次に、阪井（2015）では、「①主として始業時、ごく短時間（5分間）で行う活動 ②一定期間、継続的に行うことにより、基礎的、基本的な力をつけることをねらいとする活動 ③必ずしも本時の導入として直結しない場合もあるが、上記のねらいに即した活動」だとしている。最後に、江上（2019）では、「45分間の音楽の授業内の短時間で継続的に行うことで、子どもたちに音楽の力をつけていくもの」だと定義した。なお、阪井（2015）、江上（2019）はいずれも、小学校音楽科における常時活動実践の研究である。

また、江上（2019）はとりわけ授業における「導入」と「常時活動」の違いについても言及している。江上によれば、「導入とは言わば授業の前フリであり、どのように本活動につなげていくかというのが重要である。しかし、常時活動とは、学びを積み上げていくために、音楽の基本的なことを常時行っていくもの」だとし、さらに、中島寿の研究論文を引用し、「導入はその時間の本活動に必ずつながるものだが、常時活動は別の時間の本活動にもつながっていくものだ」とも述べている。併せて、「どの時間の本活動にもつながらずに、常時活動だけで独立した学びになっても良い」とも述べているとされ、導入と常時活動の明確な違いについて言及している。

5-2. 本研究における常時活動の定義

上記の先行研究を踏まえて、本研究における常時活動の定義を「授業の冒頭10分間を使って一定期間継続して行い、子どもたちが音楽の言葉を使って表現することができる力をつけることをねらいとした活動」とする。

6. 知覚と感受について

では、先述で定義した「音楽の言葉」とは何かについて言及していく。鑑賞領域の学習では、批評という行為が重要となる。音楽科における批評については、学習指導要領解説で「音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者と伝え合い、論じ合うこと」と示されている（p.30 第2章 音楽科の目標 2(2)鑑賞領域の内容 ④音楽の鑑賞における批評）。併せて、「それが他者に理解されるためには、客観的な理由を基にして、自分にとってどのような価値があるのかといった評価をすることが重要となる。ここに学習として大切な意味がある。評価の根拠をもって批評することは創造的な行為であり、それは、漠然と感想を述べたり単なる感想文を書いたりすることとは異なる活動である」とされ、音楽を聴いてそれを享受するという受動的な学習ではなく、批評する活動を通して、その音楽のよさや美しさをより深く味わって聴けるようになることを目指している。

批評をする上での客観的な理由に当たるのが、「知覚と感受」である。学習指導要領解説において、知覚とは「聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識すること」であり、感受とは「音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れること」であるとしている。また、「音楽の学習においては、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることが重要である」とし、「本来、知覚と感受は一体的な関係にあると言えるが、知覚したことと感受したことをそれぞれ意識しながら、両者の関わりについて考えることが大切である」と示している（p.32-33 第2章 2(3)〔共通事項〕の内容 ②知覚と感受の関わり）。これらから知覚と感受の両者の関係を見てみると、感受したことの音楽的な理由に当たるものが知覚であるという関係性となっていることがわかり、知覚と感受との関わりについて考えるこ

とで音楽科における批評を行うことができると言える（図1）。

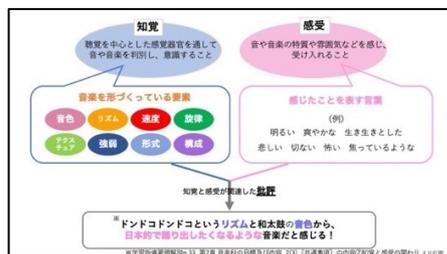


図1：知覚と感受の関わり及び批評の例

ここまで述べた知覚と感受については、学習指導要領における〔共通事項〕アでも「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること」として示され、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な思考力・判断力表現力等として位置付けられている。なお、〔共通事項〕とは、平成20・21年改定の学習指導要領から設定されたものであり、設定された背景には、「指導のねらいや手立てを明確にし、児童生徒が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習を充実することが求められている」ということがある。これらより、知覚したことや感受したこととの関わりについて考えることは、音楽教育に共通して必要な学習の基盤の一つであること、また、知覚や感受についての指導の手立てを明らかにすることへの意義が見てとれる。

7-1. 常時活動のねらいと設定の背景

ここからは、実習校において実践した常時活動を1年目、2年目それぞれに分けて紹介していく。なお、甲府市立の異なる中学校でそれぞれ活動を行い、いずれも対象は中学校第1学年の生徒、活動時間は授業の冒頭10分間である。本活動のねらいは、知覚したことと感受したことを分けたり、関連づけたりしながら、音楽から享受したイメージや感情を表現したり、音楽の言葉を使って曲の批評ができるようになることである。また、補助的な

ねらいとして、生徒がたくさん音楽に出会う機会を積極的に作りたいという思いもあった。生徒たちにとって、鑑賞の時間は長くて難しい曲を聴く退屈な時間だという印象があり、加えて、曲を聴いて自分の思いを言葉にすることに対して難しさや苦手意識を感じていたという背景があることから、意図的に2～5分程度の短い曲で、かつ、生徒自身が思いやイメージをもちやすく、共感を得やすい曲を教材として選択した。

7-2. 1年目の常時活動の実践について

1年目は、全9回にわたる常時活動を実践し、10回目で事後アンケートを実施した。扱った曲目は以下の通りである（図2）。

1年目の常時活動で扱った曲	
1.	動物の園内祭より 堂々たるライオンの行進
2.	ワルツィング・キャット
3~4.	動物の園内祭より 白鳥
5.	雨だれ 前奏曲
6.	ペール・ギュントより 朝
7.	テイル・オイレッシュビーゲルの愉快なはずら
8.	となりのトロロより 風の通り道
9.	虹の脈より 時代の風

図2：1年目の常時活動で扱った曲目一覧

ここでは、実際の活動の様子のうち、第1回、第2回、第9回の3つを抜粋して紹介する。

まず、第1回《堂々たるライオンの行進》は、事前アンケートの代わりとして、生徒がどの程度批評ができるかを実際の活動の中で調査した。全体的な印象としては、感受に関わる言葉の表出が少ないと感じられ、課題意識が生まれた。一方で、知覚に関わる言葉の表出として、やはり強弱の変化は分かりやすかったようで、記述できる生徒が多かった。しかし、「強弱がすごい」のような記述が多く、どのような強弱の変化があったのかということまで記述できている生徒は少なかった。今後、感受と結びつけて考える上で、より適切な表現とし知覚の言葉を使えるようになるための練習や毎回のフィードバックが必要だと感じた。

第2回《ワルツィング・キャット》では、

最終回となった第9回目では、『紅の豚』より、『時代の風～人が人でいられた時～』を扱い、これまでの集大成としてワークシートの枠を知覚と感受で分けずに、より自由度の高い一つの枠のみで提示した（図8）。

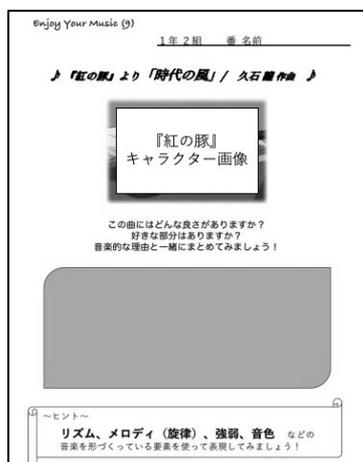


図8：《時代の風》ワークシート

活動の積み重ねによって、このような提示の仕方でも困ることなく、スラスラと記述に向かえる生徒が非常に多く、知覚と感受を関連させた批評の文章で記述できる生徒が7割以上と、大半の生徒の記述内容が向上していることが見てとれた（図9）。また、これまで自分の思いを言語化することが非常に苦手で記述そのものに苦手意識があり、白紙のまま提出することもあるような生徒も、感受の言葉のみではあるが、自分の言葉で表現しようとする姿が見られ、常時活動の成果をうかがうことができた（図10）。

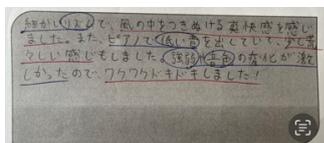


図9：生徒の記述4



図10：生徒の記述5

知覚の言葉を増やす工夫としては、音楽を形づくっている要素の内、強弱などの聴き取りやすいものから始め、活動を重ねるごとに

リズムや旋律、テクスチュアなど、より複雑で聴き取るのが難しい要素へと拡大していくことで、語彙の獲得と聴き取る力の育成を目指した。ヒントとして提示した要素は毎回2～3個ずつと限られているが、ヒントとして挙げていない調などについても、既習の知識を活かして自由に記述する生徒もいた。

事後アンケートでは、「小学校の時は鑑賞が苦手だったが、10分間鑑賞で楽しいと思えるようになった」とや、「思ったことを自由に何でも書いて良いから難しく考えずに取り組むことができた」となどの感想をいただくことができた。一方で、今後の課題としては「書くだけでなく発表できたらもっと楽しい」という意見があった点に答えることができなかったことである。10分間という短時間のため、発表したり周囲の人と話し合ったりする時間はほとんど作らず、自己内対話での完結としたが、「批評」は「音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者と伝え合い、論じ合うこと」であるため、他者との関わりも非常に重要である。これらを踏まえて、次年度の研究へと向かった。

7-3. 2年目の常時活動の実践について

2年目は、全8回にわたる常時活動を実践し、活動前と全活動終了後に事前・事後アンケートを実施した。なお、事前アンケートの結果は、本稿2.研究動機に示した通りである。

扱った曲目は以下の通りである（図11）。1年目と大きく異なるのは、第5回目から第7回目にJamboardを取り入れた点である。

2年目の常時活動で扱った曲	
1.	動物の園内景より 堂々たるライオンの行進
2.	ワルツィング・キャット
3.	蝶々
4.	白鳥
5.	ペール・ギュントより 朝
6.	小鳥
7.	となりのトトロより 風の通り道
8.	紅の豚より 時代の風

図11：2年目の常時活動で扱った曲目一覧

ここでは、実際の活動の様子のうち、第3回、第6回、第8回の3つを抜粋して紹介す

る。

まず、第3回《蝶々》では、紙のワークシートを用いた個人活動として活動を実施した。Jamboardの使用に移行することを想定し、ワークシートの形を構成し直した(図12)。

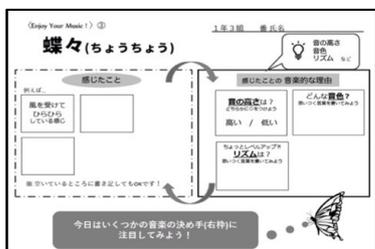


図12:《蝶々》ワークシート

また、昨年度と同様、感受の言葉が出てこない生徒も一定数見受けられたため、図7で示した感じたことを表す言葉のプリントをサポートツールとして配布するとともに、プリントの言葉限定にならずに自分なりの言葉で表現するよさについても伝えた。生徒の活動の様子は以下の通りである(図13)。

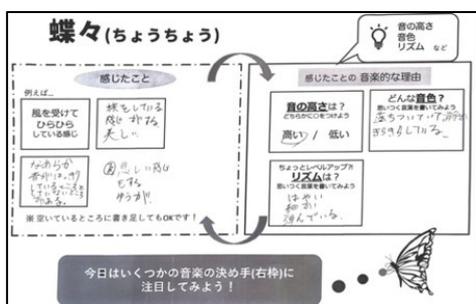


図13: 生徒の記述6

続いて、第6回《小鳥》は、Jamboardを用いたグループ活動として実施した。即時的かつ双方向に意見の共有が可能なJamboardの強みを活かし、発表時間を短縮しながら、他者の考えに触れることのできる時間となった。また、新たに「チャレンジ」として知覚と感受の両枠を見比べて、関連づけられるものを線でつなぐという活動も実施した。この活動は、批評に近づく大きな一歩となった。生徒からは、「他の人の考えが自分の考えと似ていて安心した」や、「違う考え方に触れられた」や、「誰が書いているか分からないから恥

ずかしくなくて良い」など、様々な見方での意見があった。生徒の活動の様子は以下の通りである(図14, 15)。

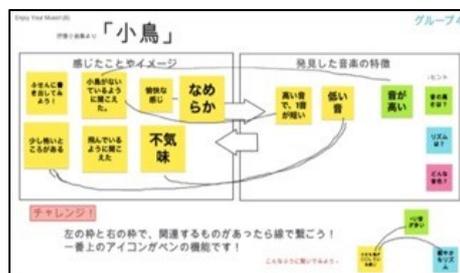


図14: 生徒の活動の様子1

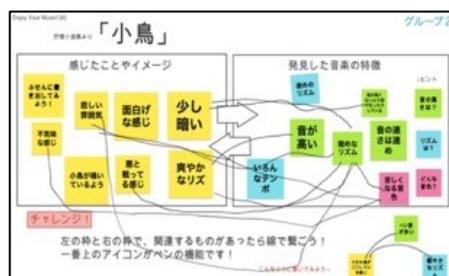


図15: 生徒の活動の様子2

また、Jamboardでの活動を継続すると、生徒たちは線の色や太さ、本数で結びつきの強さを表現するようになっていた。生徒の発想到に驚き、こちらも学ばせていただけた良き時間となった。

最終回となった第8回目では、『紅の豚』より、『時代の風～人が人でいられた時～』を扱い、これまでの集大成として紙のワークシートでの個人活動とした。知覚と感受をそれぞれ結びつけるとともに、批評の文章を書き上げてみるという活動をした。以下に生徒のワークシートの記述を示す(図16, 17)。なお、図16は記述が得意な生徒であり、図17は記述が苦手な生徒である。記述が苦手な生徒も、音楽を聴いて何かしら言葉に表そうとし、知覚と感受の書き分けが上手くいっていない部分もあるものの、批評の文章にした際は、知覚と感受それぞれを結びつけ、自分なりの言葉で表現しようとしている姿が見てとれる。

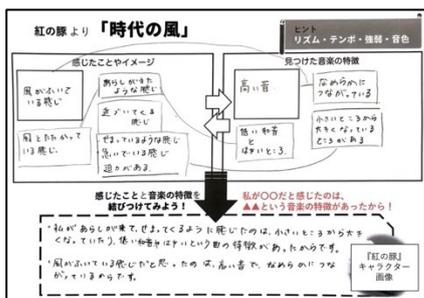


図 16：生徒の記述 7

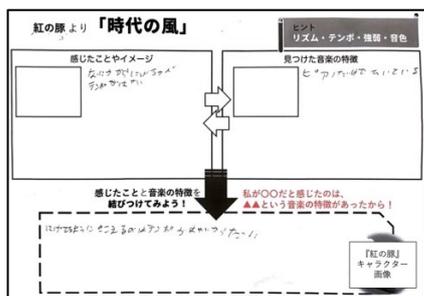


図 17：生徒の記述 8

最終回の後に実施した事後アンケートでは、「鑑賞の授業についてどう感じていますか?」、「鑑賞の授業で曲を聴き、その曲の良いところを見つけたり、なぜそう思ったのかを言葉で説明したりすることは得意(好き)ですか?」のどちらの設問でも肯定的な意見が増加した(図 18, 19)。この結果から、鑑賞の授業そのものには肯定的であるものの、言葉で説明するという過程を追加すると鑑賞活動に対する苦手意識や嫌悪感を持つ生徒が増えるという課題に対する改善の傾向が見られたと言える。また、「10分間鑑賞の活動はこれからの鑑賞の授業に活かせそうですか?」の設問に対しては、86.6%の生徒が活かせる・やや活かせると回答し、生徒自身の鑑賞の学習に向かうハードルの高さを下げるとともに、意欲の向上が期待される結果となった。

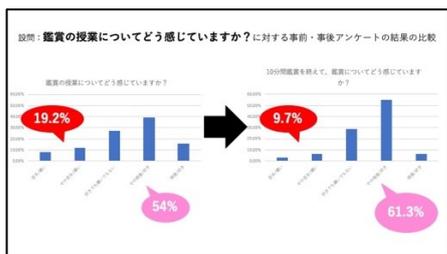


図 18：事前・事後アンケートの比較 1

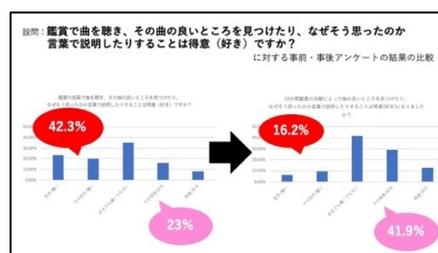


図 19：事前・事後アンケートの比較 2

8. 鑑賞領域における常時活動の一提案

ここまでの2年間の実践を踏まえて、中学校音楽科における鑑賞領域の効果的な常時活動を一提案という形でまとめる。まず、活動時間は授業の冒頭10分間とし、ある程度連続した8~10回が確保できると良い。短縮授業や、本活動が鑑賞領域の授業の場合など、取り入れにくい場合は次回に見送るなど、弾力的な常時活動の実施が現実的である。

活動の流れを以下に示す(図 20)。全体を5つの段階に分け、まずは学習前の記録として批評の文章を書いてみることから始める。続いて個別の活動、グループでの活動をそれぞれ行い、知覚と感受それぞれをどのような言葉で表すことができるのかを学習する。その後、単語ではなく自分なりの言葉で表すという過程を通して、語彙の豊かさを広げていく。これらの学習の後、再度批評の文章を書き、初回との自己変容を見取るという流れである。



図 20：提案する常時活動の流れ 1

また、これらの5つの過程をワークシートの変遷で辿ると、以下のような流れとなるのが望ましい(図 21)。また、扱う曲目については、生徒が音楽を聴いてイメージや感情を受け入れやすいものを中心とし、聴き取らせたい音楽を形作っている要素は、強弱などのわかりやすいものから始め、回を追うごとに複雑化

していくという流れをとる（図22）。

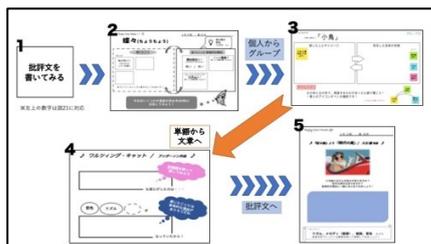


図21：提案する常時活動の流れ2

具体的な常時活動の方針	
扱う曲	
(1) 動物の謝肉祭より「堂々たるライオンの行進」	強弱
(2) ベール・ギユントより「朝」	強弱 音色
(3) 「ワルツィング・キャット」	音色 クラシカ
(4) 「蝶々」	音色 クラシカ
(5) 「白鳥」	音色 クラシカ
(6) 「雨だれ」前奏曲	強弱 音色 クラシカ 構成
(7) とりのトロより「風の通り道」	強弱 音色 クラシカ
(8) 虹の膝より「時代の風」	強弱 音色 クラシカ 構成

図22：提案する常時活動の流れ3

この常時活動の実施により、鑑賞の授業の評価は文章化された成果物で行われることが多いという現状にアプローチし、生徒らが曲のよさやおもしろさを言葉で説明することができる力を身につけることができると考える。一度きりの鑑賞の授業では言葉で表すのが苦手で、良いと思うところがあっても上手く言葉にできずに困っている生徒や、そもそも説明の仕方がわからずにいる生徒は、「できなかった」という意識で学習を終えてしまう可能性があるが、効果的なサポートツールを提示しながら、継続的にアプローチを続けることで、生徒らの「できる」「わかる」という思いを引き出し、音楽への楽しさを見出すきっかけとなると考える。

また、本研究は鑑賞領域での知覚と感受の言葉の獲得を目指したものであるが、知覚と感受は〔共通事項〕に示されているため、本研究における常時活動の実践により、鑑賞領域での学習が表現領域での学習に還元される効果も期待できる。今後は所属校での実践を通じて、さらに良い学習指導の在り方を探っていきたい。

9. 引用・参考文献

- ・江上加奈恵（2019）「小学校音楽教育における常時活動について」『学校音楽教育実践論集3』p.60-61
- ・阪井恵・酒井美恵子（2015）「小学校音楽科授業における常時活動の実態に関する研究—調査報告と、その結果をめぐる考察—」『学校音楽教育研究』第19巻 p.232-233
- ・佐野（2014）「表現力の育成に向けた言語活動のあり方—学級活動と教科（音楽科）における言語力の向上に着目して—」『山梨大学 教職大学院の研究活動 平成25年度 教育実践研究報告書』
- ・佐野（2015）「音楽表現力を向上させるための言語活動のあり方—グループ活動に着目して—」『山梨大学 教職大学院の研究活動 平成26年度 教育実践研究報告書』
- ・高倉弘光・中島寿・平野次郎（2011）「特集 確かな力をつける！常時活動のアイデア」『教育音楽』2011年11月号、音楽之友社、p.29-35
- ・原田（2015）「鑑賞の力を高めるための知識の形成とその具体的方策—小・中学校における「音楽づくり（創造）と鑑賞」の授業を通して—」『山梨大学 教職大学院の研究活動 平成26年度 教育実践研究報告書』
- ・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 音楽編
- ・文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説 音楽編

謝辞

この研究を遂行するにあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧な指導して下さった山梨大学大学院総合研究部教育学域教育実践創成講座 片野耕喜教授に心よりお礼申し上げます。

そして日頃からさまざまなご助言、ご指導下さった実習校の先生をはじめとする諸先生方に心より感謝申し上げます。